

静岡県の地質をめぐって  
沼久保の動物の足跡と骨格化石  
横山謙二



写真1. 偶蹄類足跡の断面と思われる跡

富士宮市沼久保の富士川河川敷には、富士山ができる前の約80万～50万年前の地層が約250mにわたり連続して露出しています。この地層は、礫やシルトからできていることから沼久保礫シルト部層とよばれ、下流側に大きく傾き、上流側に古い時代の地層が、下流側に新しい時代の地層が見ることができます。

この地層を調べてみると、主に河川流域に堆積した砂礫や河川に隣接した氾濫原に堆積した泥からできていて、中部に見られる泥層は河口付近に堆積した地層のようです。

氾濫原に堆積したと考えられる泥層には、大量の植物化石や植物の根跡、立ち木化石などがたくさん含まれています。また、この泥層中には、薄く砂や礫の層が挟まれ、粒子が配列した模様（ラミナ）を作っていることがあります。これは、洪水時、河川の流路から溢れだした堆積物だと考えられます。この礫や砂の層は、通常は乱れがなく、平らに堆積しているのですが、しばしば凹型に大きく歪んでいたりすることがあります。これは動物の足跡だと考えられ、中には偶蹄類のツメの跡（写真1）らしきものが残るものもあります。

中部に見られる泥層は、大きな礫を含むような礫層を挟まなくなり、氾濫原の泥層のように植物の根跡などがほとんど見られず、かわりに径2～3cm程のパイプ状に延びる模様が見れるようになります。これは、カニや貝類などの巣穴痕です。また、この泥層の最上部層からはウミタケガイやウラカガミガイなどの潮間帯付近



写真2. カズサシカの角化石（阿部ほか，2001）

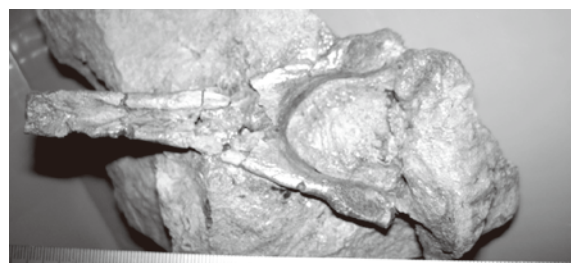


写真3. ゾウの頸椎化石

に棲む貝類の化石が産出しています。これらのことから、この泥層は潮汐の影響を受ける河口付近の堆積物と考えられます。このことは、河川地域であった環境が、海面が上昇し、海水が流入するような環境に変化したと推定できます。

この河口付近の堆積物と考えられる泥層からは、これまでにシカ属の骨格化石（写真2）がたくさん発見されています。また最近では、ゾウの子供の首の骨（頸椎）と思われる化石（写真3）も見つかりました。このゾウの化石は、現在調べている途中ですが、この地層の南側の南松野付近に分布するほぼ同時代に堆積した地層からトウヨウゾウの臼歯の化石が産出していることから、おそらくトウヨウゾウの子供のものと思われる。このトウヨウゾウは、この沼久保礫シルト部層の堆積したころには日本各地にいたと考えられています。

このように沼久保礫シルト部層を調べることによって、約80万～50万年ほど前の環境やその変化がわかります。また、骨格化石を多く含むことから、これからもまだ発見されていない動物の化石が見つかるかもしれません。